

地方独立住宅における和室の保有状況および起居様式に関する研究

——岐阜県住宅供給公社分譲住宅における事例調査——

新田米子・河内美代子*

A Study on Dwelling Style and Seating Style of Local Detached Houses

—— A study on Detached Houses of The Housing Supply Corporation of Gifu Prefecture ——

Yoneko Nitta, Miyoko Kouchi

Summary

The purpose of this study is to clarify the number of Tatami rooms, possession of connected Tatami rooms, the style of seating and sleeping, and an evaluation on Tatami rooms. We conducted a survey among residents of detached houses which were sold by The Housing Supply Corporation of Gifu Prefecture in December 1994.

It was found that approximately 80% of residents had more than two Tatami rooms and approximately 50% of residents had connected Tatami rooms. Although approximately 80% of residents had an European-style living room, seating style was not only European-style but also Japanese-style or a combined style. Residents aged forty and fifty prefer Japanese-style when sleeping and especially when receiving guests. A lot of residents had a high regard for Tatami rooms.

It is possible to say that Tatami rooms are important in detached houses.

Received Apr. 28, 1995

Keywords: Detached house, Number of Tatami rooms, Connected Tatami room, Seating style

1. 研究目的

我が国の住宅における接客本位から家族本位へのスローガンは、明治以降一貫して唱さえ続けられてきたが、現在なお接客を意識した続き間座敷の人気はとくに地方住宅において衰えていない。家族形態の変容、人々の価値観の多様化等によって我が国の住宅は今後なお変貌していくものと予想されるが、地方の住様式の変化の速度は、大都市部に比べ緩慢であり、今後も大都市とは多少異なった形での地方の住様式が展開されていくのではないかと考えられる。

*COACH住宅改善提案室

筆者らが、これまで中部圏の大都市近郊に立地する集合住宅において実施した住様式に関する調査結果からは、「就寝」と「改まった客の接客」において床座志向が比較的強く残ることが明らかとなり、さらに、和室数が減少する中で集合住宅においても「2室」以上の和室要求が3割弱存在することが把握された。¹⁾地方の独立住宅においては、延べ床面積、室数において集合住宅のそれを上回るため、複数の和室確保はより容易となる。しかしながら、住宅生産タイプ（住宅供給主体）によっては和室数の減少化が目立ち、今後徐々に増加すると予想される輸入住宅に至っては、当然のことながら和室は皆無という間取りで成り立つ。また、岐阜県住宅供給公社が1989年より実施している、国内外の女性建築家を対象とした住宅競技設計への応募作品では、1994年度までの作品で見ると、居室の中の和室数は全般的に少ないのが特徴的である。それらの中からいくつかの優秀作品が選出され、これまでに7軒の住宅が建設、分譲されているが、²⁾建設段階で間取りを変更したり、購入者が入居後に洋室の一部を和室に模様替えしたりするという事態が生じている。

住宅の居住性は、和室の居室が増せばそれで一気に高まるという単純なものではないにしろ、この住宅競技設計作品の設計変更例をみても地方の人々の和室志向の強さが伺われ、新しい住様式の提案が必ずしも容易には受け入れられない状況が読み取れる。

伝統的住様式と現代的な感覚を取り入れた新しい様式とがうまく融合された形の、新しいタイプの地方住宅の出現が望まれている。今日、それらの実現のためには、地方の人々の伝統的生活様式や価値観がどの部分で残り、どの部分が柔軟に変容していくのかを見極めることが大事であろう。本研究では、このよ

表1 調査票回収状況

	花かいどう団地	華西団地	合計
配布数	120	66	186
回収数	99	52	151
有効回収率	82.5%	78.8%	81.2%

表2 対象団地の概要

	花かいどう団地	華西団地
所在地	岐阜市大字安食字長古	岐阜市福正2丁目
分譲開始時期	S.52年	S.54年
計画戸数	199戸	80戸

表3 対象世帯の属性

世帯人員	3人以下	52(34.4%)	
	4,5人	84(55.6)	
	6人以上	11(7.3)	
	不明	4(2.6)	
ライフステージ	長子乳幼児	18(11.9)	
	長子小学生	24(15.9)	
	長子中高生	54(35.8)	
	長子成人	26(17.2)	
	夫婦のみ(妻40歳代以下)	5(3.3)	
	夫婦のみ(妻40歳代以上)	15(9.9)	
	その他	9(6.0)	
夫・妻の年齢		夫	妻
	30歳代以下	33(21.9)	57(37.7)
	40歳代	59(39.1)	51(33.8)
	50歳代	26(17.2)	27(17.9)
	60歳代以上	22(14.6)	12(7.9)
	不明	11(7.3)	4(2.6)
夫の職業	事務、販売、サービス職	60(39.7)	
	専門、技術職	38(25.2)	
	個人業種	15(9.9)	
	その他	23(15.2)	
	不明	15(9.9)	
妻の就労形態	フルタイム	30(19.9)	
	パートタイム	36(23.8)	
	無職	74(49.0)	
	不明	11(7.3)	

うな観点から、地方住宅の和室の存在に焦点をあて、和室数、和室の形態（続き間和室の有無、和室と他室のつながり方等）の実態把握を試み、それらがいかなる外的条件によって、また居住者のいかなる生活様式、価値観等によって影響を受けているのかを明らかにしようとするものである。

2. 研究方法

地方都市の平均的な所得階層として、岐阜県住宅供給公社による分譲住宅および同公社宅地分譲による独立住宅に居住する世帯を調査対象として選定し、主婦にあたる成人女性を対象にアンケート留置自記法による調査（一部郵送回収）を実施した。調査期間は、1994年12月3日から同月12日にかけてである。

調査票の回収状況は、配布数が186に対し、回収数が151で回収率は81.2%であった（表1）。

表4 対象住宅の概要

		花かいどう団地	華西団地	合計
入居年	～S. 5 5	9(9.1%)	35(72.9%)	45(29.8%)
	5 6～6 0	17(7.2)	8(16.7)	27(17.9)
	S. 6 1～H. 3	50(50.5)	3(6.3)	54(35.8)
	H. 4～	22(22.2)	2(4.2)	24(15.9)
	不明	1(1.0)	0(0.0)	1(0.7)
住宅生産タイプ	公社分譲	59(59.6)	41(85.4)	102(67.5)
	注文在来	15(15.2)	3(6.3)	19(12.6)
	注文ツブバイフォー	13(13.1)	1(2.1)	15(9.9)
	プレハブ	7(7.1)	0(0.0)	7(4.6)
	その他	3(3.0)	0(0.0)	3(2.0)
	不明	2(2.0)	3(6.3)	5(3.3)
住宅構造	木造	70(70.7)	38(79.2)	112(74.2)
	鉄骨造	17(17.2)	5(10.4)	22(14.6)
	RC造	2(2.0)	1(2.1)	3(2.0)
	混合・その他	4(4.0)	4(8.3)	8(5.3)
	不明	6(6.1)	0(0.0)	6(4.0)
延べ床面積	～1 0 0㎡	14(14.1)	19(39.6)	34(22.5)
	1 0 0～1 2 0	35(35.4)	18(37.5)	55(36.4)
	1 2 0～1 5 0	31(31.3)	5(10.4)	37(24.5)
	1 5 0～	14(14.1)	4(8.3)	18(11.9)
	不明	5(5.1)	2(4.2)	7(4.6)
台所形態	K独立	20(20.2)	4(8.3)	26(17.2)
	各室独立	9(9.1)	2(4.2)	12(7.9)
	DK	24(24.2)	35(72.9)	60(39.7)
	LDK	43(43.4)	6(12.5)	49(32.5)
	不明	3(3.0)	0(0.0)	4(2.6)

3. 調査対象の概要

調査対象は、岐阜県住宅供給公社が岐阜市内に計画した2箇所の住宅団地である（表2）。一つは、岐阜市北西部に位置する「花かいどう」団地であり、ここには前述の競技設計入選作品による7軒の住宅も建設されている。もう一方は、同市南西部に位置する「華西」団地で、入居開始のピークが前者よりいくぶん早く、市中心部への交通アクセスは「華西」のほうが恵まれている。

4. 結果及び考察

(1) 対象世帯の概要

対象世帯の属性をまとめると表3のようになる。

世帯人員は「4, 5人」が中心で(55.6%)、ライフステージは「長子中高生」が35.8%を占める。世帯主の年齢は「40歳代」に集中し(39.1%)、夫の職業は「事務職」39.7%、「専門職」25.2%、「個人業主」9.9%の順となっている。また妻の就労形態は、「フルタイム」が19.9%、「パートタイム」が

23.8%で、就労率はあまり高くはない。

(2) 対象住宅の概要

回答者の住宅を概観すると表4のようになる。

現住宅への入居年は、1986(S. 61)年以降が半数強を占め、そのうち1992(H. 4)年以降の居住歴の浅い世帯が全体の15.9%となる。1980(S. 55)年以前の団地開設当時に入居した世帯は全体の29.8%である。

住宅を生産タイプ別に分類すると、「公社分譲」住宅が67.5%で、公社以外のものは「注文・在来工法」による住宅が12.6%、「注文・ツーバイフォー工法」によるものが9.9%、「プレハブ住宅」が4.6%の割合となっている。

住宅構造は「木造」が多数を占める(74.2%)。

延べ床面積は、「100~120㎡」が中心となっているが(36.4%)、「150㎡以上」の比較的規模の大きいものが11.9%程度存在する。

平面構式上の台所形態では、「DK型」が39.7%と他のタイプより多い。そしてこの「DK型」は、入居時期の早い世帯が多い「華西」団地では高率となるのが特徴である。

(3) 和室の保有状況

和室を量的な側面から把握するため、和室数及び和室数率(総居室数に占める和室数の割合)について分析を試みる。

和室数を全体でみると(図1)、「0室」の例はわずか2%にすぎず、「2室」38.2%、「3室以上」が42.3%を占め約8割の住宅で2室以上の和室を保有することとなる。また和室数率でも、「50%」以上の和室数率をもつ住宅が5割強を占め、居室の中で和室の占める比率が比較的高いことがわかる(図2)。

和室数に影響を及ぼす要因としては、延べ床面積、居室数、建設年(本調査では入居年)、住宅生産

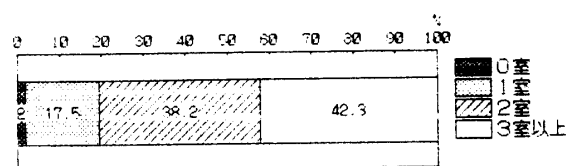


図1 和室数 (n=149)

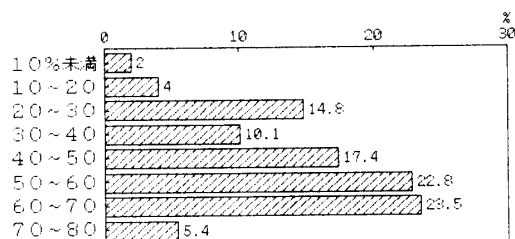


図2 和室数率 (n=149)

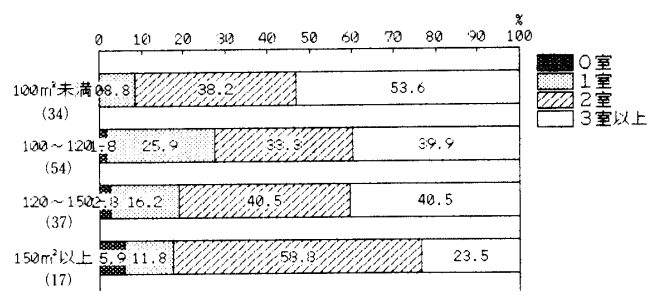


図3 和室数 <延床面積別>

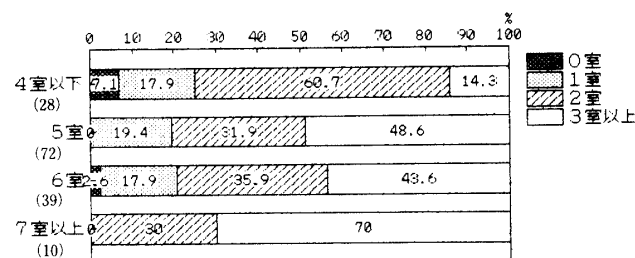


図4 和室数 <居室数別>

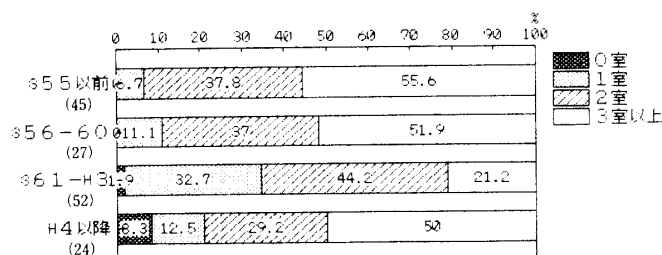


図5 和室数 <入居年別>

タイプ、家族形態、ライフステージなどが考えられる。これらの因子と和室数との関連について順次みていく。

まず延べ床面積別に表した和室数をみると(図3),「100㎡未満」の小規模住宅において和室「3室以上」が53.6%を占め、逆に規模の大きい「150㎡以上」の住宅では「2室」が中心となり(58.8%),「3室以上」がそれ程増すということはない。小規模住宅では、転用性に富む和室のほうが、用途を固定化しやすい洋室よりも便利であるとの理由からこのような結果となったのではないと思われる。しかし、同じく住宅の規模を表す指標となる居室数で比較した場合、居室数「5室」を境に和室「3室以上」の比率が分かれる(図4)。つまり、居室数が増加すると和室数もそれに伴って増加する傾向が認められ、住宅規模の影響因子としては、延べ床面積よりも居室数のほうが有力であると考えられる。

住宅の建設年次による和室数の変化については、本調査では入居年で尋ねているので、入居年別で比較を試みると(図5),「S. 61~H. 3年」入居住宅でそれ以前のもの比べ和室数が減少する傾向がみられるが、「H. 4年~」の入居で再び「S. 60年以前」の入居と類似した傾向を示すようになるため、この10年間の推移をみる限りでは、和室数は減少傾向にあるとは必ずしもいえない。

住宅生産タイプ別では(図6),「公社分譲」と「注文・在来工法」の両住宅で和室数が多くなり「3室以上」の比率がそれぞれ48.5%, 50.0%となる。これに対し「注文・ツーバイフォー工法」と「プレハブ」の両住宅では、「1室」または「2室」にとどまることがわかり、これらの住宅に比べ前2者の住宅は、この地域の伝統的住様式をより色濃く取り入れていることが伺われる。

次に、家族形態やライフステージといった居住者の相異による影響について着目すると(図7,

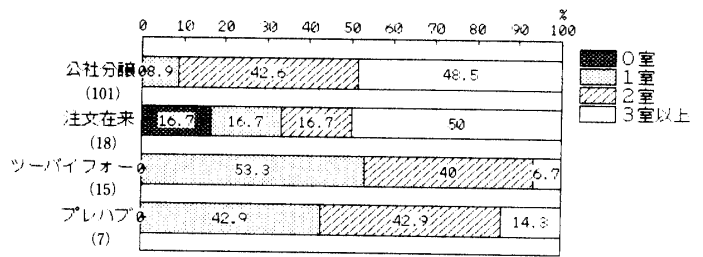


図6 和室数<生産タイプ別>

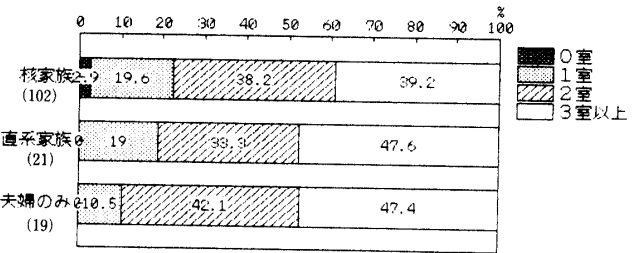


図7 和室数<家族形態別>

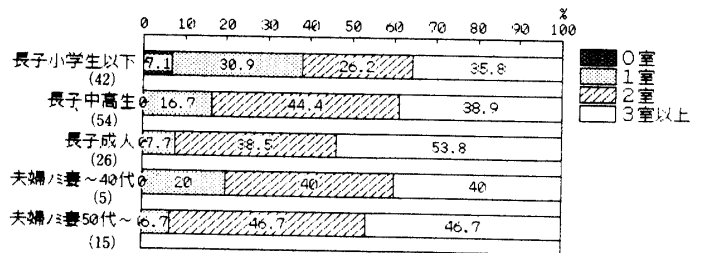


図8 和室数<ライフステージ別>

表5 和室数・続き間和室に影響を及ぼす要因

影響因子	和室数	続き間和室の有無
入居年	※※	
住宅生産タイプ	※※※	※
延べ床面積		
居室数	※※	—
1F居室数	—	※※※
家族形態		
ライフステージ	※※	

※※※ 1%水準、※※ 5%水準、※ 10%水準で有意差有り
—はクロス集計結果無し

8)、「核家族」よりも「直系家族」世帯において和室数が若干多くなり、またライフステージの低い「長子乳幼児」「長子小学生」の世帯において和室数が減少するといった差異が認められ、若い世代における和室離れがいく分感じられる。

(4) 続き間和室, 床の間付き和室

伝統的住様式の継承について探るため、和室数の他に続き間和室（本論では広義の意味での「続き間和室」³⁾を取り上げる)の存在や床の間付き和室の有無について分析を試みる。

続き間和室は、全体の49.3%が保有しているが、この値は、佐藤の報告⁴⁾による(1991年)「岐阜・三重」の同値75.0%、また岐阜県における公庫融資住宅(S. 62~H. 2)の同値63.0%よりは低い値となっているが、全国平均値42.0%よりはやや高い。⁵⁾

この続き間和室の影響因子としては、和室数と同様に、延べ床面積、1F居室数、入居年、住宅生産タイプ、家族形態、ライフステージを取り上げ、さらにこれらに冠婚葬祭の自宅での実施有無という要素も付け加えて分析を行なった。結果は、表5及び図9~12に示す。

分析の結果ある程度関連性の認められた項目は、1F居室数、住宅生産タイプであった。すなわち、1F居室数では「3室以上」の住宅で、住宅生産タイプでは「公社分譲」住宅でそれぞれ続き間和室を有する割合が高くなることが認められた。家族形態、ライフステージ、冠婚葬祭の実施有無では、有意差は認められないものの、家族形態では「直系家族」で、夫年齢では「40歳代以上」で、冠婚葬祭の実施有無では「有り」の世帯でそれぞれ続き間和室の割合が若干高くなる傾向がみられた。これらの結果から、続き間和室の存在要因と和室数の影響要因とはある

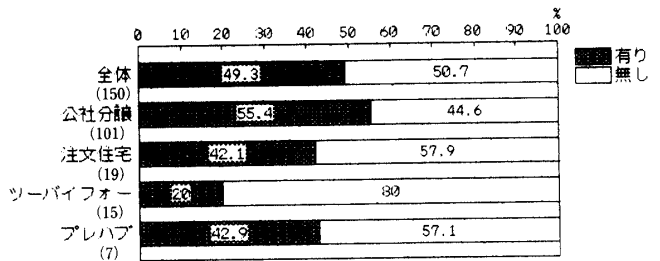


図9 続き間和室 <生産タイプ別>

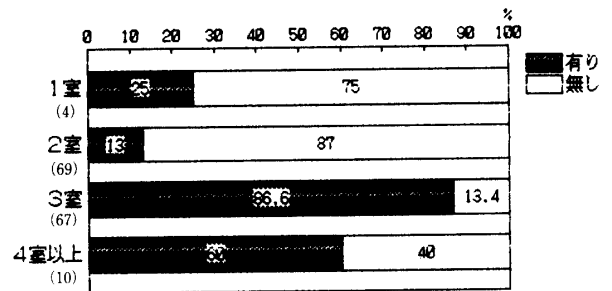


図10 続き間和室 <1階居室数別>

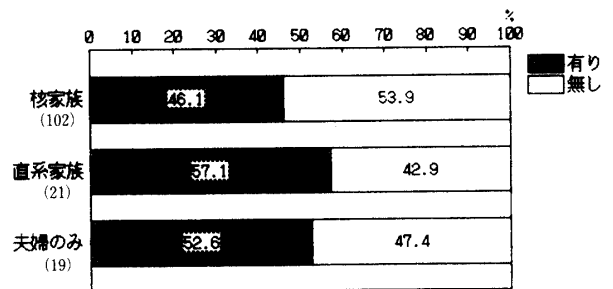


図11 続き間和室 <家族形態別>

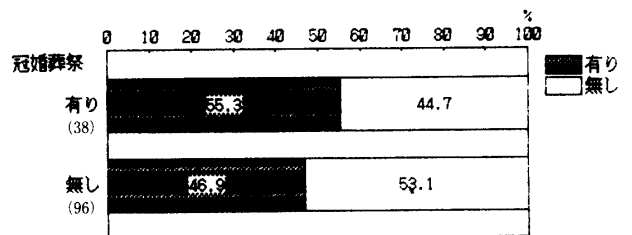


図12 続き間和室 <冠婚葬祭の有無別>

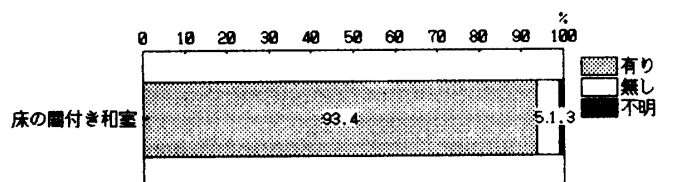


図13 床の間付きの和室の有無 (n=151)

程度共通性があることが明らかになったといえよう。

次に、床の間付き和室の有無の結果について述べると(図13), 全体の93.4%というほとんどの住宅で床の間付き和室が存在し, この地域ではまだまだ格式を重視した和室に対する執着が強いといえる。

(5) 居間の和洋と団らん様式

和室を住宅の中でどのように位置づけているかは, 和室が家族の日常空間であるL, D, Kと直接結びついているか否かを見分けることによってある程度推測が可能である。和室とL, D, Kとのつながりを表した結果をみると(図14), 食事室, 台所から直接出入りできる和室は, 各々26.5%, 22.5%であるのに対し居間から直接出入りできる和室は60.9%と多く, このことはその和室を居間の延長または居間と一体化して利用する例が多くあることを予想させる。

ここでは, このような居間の形態や居間で使用している座家具との関連で居住者の団らん様式を分析する。

まず, 居間の和洋の形態でみると, 全体の80.3%が洋室, 10.2%が和室, 9.5%が和洋併用の居間であり, 居間の洋室化がかなり進んでいるといえる。居間の和洋のタイプは, 住宅の建設時期や住宅生産タイプによって異なると考えられるが, 入居年で比較した結果によると(図15), 和室の居間は減少傾向にあり, H. 4年以降では皆無となる。また和洋併用が新しい居間のあり方としてクローズアップされた時期(本調査ではS. 61~H. 3年入居)のものは, 和洋併用タイプが増加しているが, H. 4年以降の住宅ではその傾向が続いているとはいえない。また住宅生産タイプ別では, 前項の和室数, 続き間和室

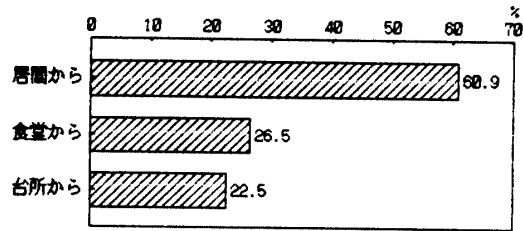


図14 LDKから直接出入りできる和室率 (n=151)

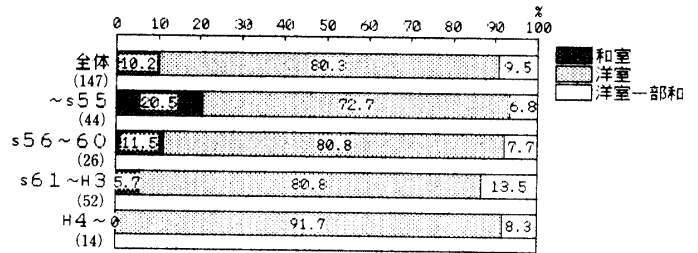


図15 居間の和洋 <入居年別>

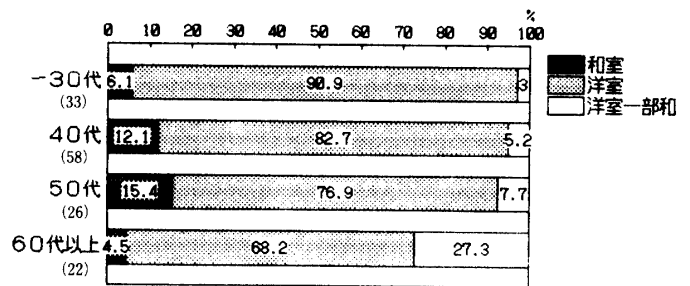


図16 居間の和洋 <夫年齢別>

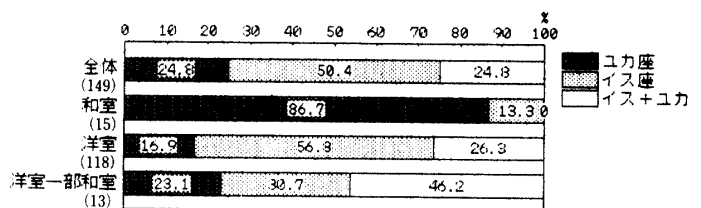


図17 団らん・休息スタイル <居間の和洋別>

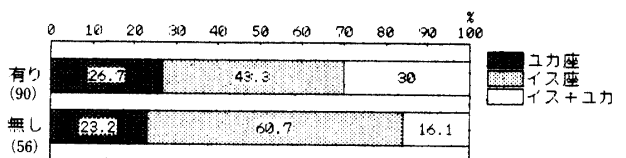


図18 団らん・休息スタイル <居間から直接出入りできる和室の有無別>

の有無で目立った値を示した「公社分譲」で和室の居間が多いことが明らかとなった（図略）。

これを夫の年齢別でみると（図16），若年層ほど洋室志向が強く，30歳代以下では90.9%が洋室の居間となる。また60歳代以上では，和洋併用タイプが27.3%と他の年代と異なる傾向を示し，高齢化と共に変化する起居様式の影響が表れているといえる。

そこで，団らん様式を居間の和洋別，居間から出入りできる和室の有無別，夫の年齢別で比較することにより，居間の形態と起居様式との関連性を掘り下げてみる。

団らんの起居様式は，「イス座」が全体の50.4%と約半数を占め，「ユカ座」と「イス＋ユカ座」がそれぞれ24.8%となり，洋室居間が多くを占める割合には「ユカ座」志向がそれほど高いとはいえない。居間の和洋別では（図17），和室の居間で「ユカ座」がほとんどを占めるのは当然と考えられるが，洋室及び和洋併用の居間に着目すると，洋室居間においても「ユカ座」が16.9%，「イス＋ユカ座」が26.3%みられ，また和洋併用居間では「イス座」が減少しイス，ユカ両様の多様な起居様式が進むことがわかる。また，居間から出入りできる和室の有無別では（図18）「有り」の住宅で「イス＋ユカ座」と「ユカ座」の比率が高まる。つまり，洋室の居間であっても「イス座」がそれほど定着しているというわけではなく，さらに洋室居間に和室が隣接したり，和洋併用の居間であったりすることにより「イス＋ユカ座」及び「ユカ座」が促されるということが本調査からも明らかになったといえよう。⁶⁾

さらに，夫の年齢別によれば（図19），居間の和洋の実態と類似の傾向がみられ，若い世代の「ユカ座」離れと高齢世代の「イス＋ユカ座」の進行が認められた。

次に，団らん様式と居間の座家具との関係を見ることにより，洋室居間の住み方の実態をより鮮明にさせたいと考える。

「ユカ座」では，夏季67.6%が「座卓」，21.6%が「こたつ」を設置し，冬季には当然ながらそれらの比率はさらに高まり（図20，21），ユカ座様式が浮かびあがる。「イス座」では，「ソファアー・長イス」の所持率が半数強となるものの，「こたつ」の設置が夏季で14.7%，冬季で38.7%にのぼる。このことは基本的にはイス座であっても，冬季などにはこたつとの併用があることを意味するものと思われる。また，「イス＋ユカ座」では，多様な住まい方を反映して，「ソファアー・長イス」の設置が最も高くな

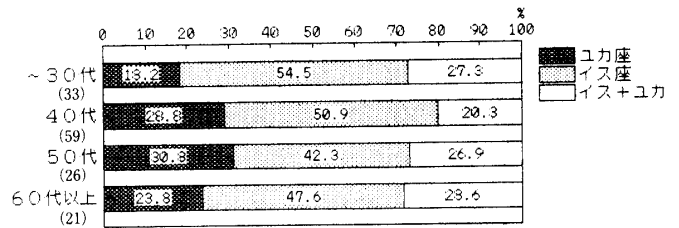


図19 団らん・休息スタイル〈夫年齢別〉

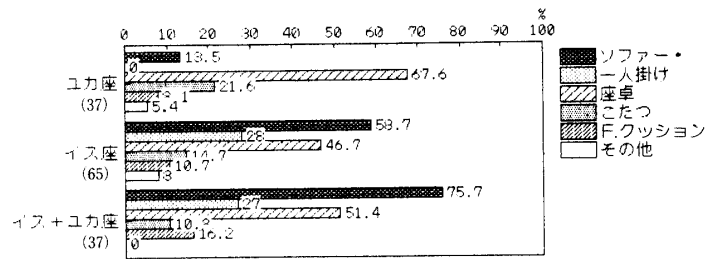


図20 居間の座家具（夏）〈団らん・休息スタイル別〉

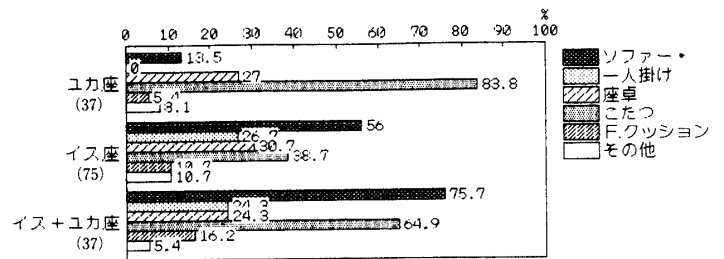


図21 居間の座家具（冬）〈団らん・休息スタイル別〉

り(夏季75.7%),「座卓」「こたつ」「フロアークッション」等の設置率も高くなっている。このような「ソファ・長イス」の洋家具と「座卓・こたつ」の和家具の併用状況を居間の広さで比較してみたところ、「6畳」程度の狭い居間での併用はあまりみられないが、「7・8畳」以上になると全般的に併用率が増すことがわかった(図略)。

(6) 就寝・接客様式

若い世代での就寝様式の「イス座」(ベッド就寝)化の進行が認められる中で、中高年のベッド就寝はそれ程進んでいるとはいえない。4)本調査の結果からもこのような状況が把握された。全体では、ベッド就寝が58.4%、「ユカ座」の布団就寝が37.6%で、年齢別では(図22)、「30歳代以下」と「60歳代以上」で半数以上がベッド就寝を占めるが、「40歳代」「50歳代」では布団就寝の方が多数を占めるようになる(前者68.0%,後者80.8%)。今後は、ベッド就寝に慣れた若い世代が中高年になっても引き続いてベッドを使用することが予想され、全体としてベッド化が進行するのではないかと考えられる。

次に、接客様式について、居間の和洋別に、また筆者らが1992年に実施した集合住宅での調査結果⁵⁾と比較しながら述べる。

友人、知人等の親しい客の接客では全体でみた場合「イス座」が進んでいる(50.3%)が、改まった客や正月客の接客になると「ユカ座」が目立ち、各々62.3%、59.6%を占める。集合住宅居住者の場合は、親しい客、改まった客(正月客については尋ねていない)両者の接客において「ユカ座」の比率は、独立住宅の場合より低い値を示していて(親しい客が18.2%,改まった客が48.0%),都市部と地方の差、あるいは

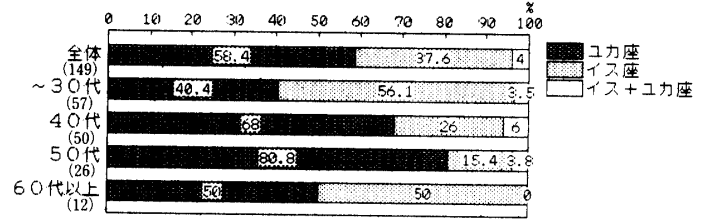


図22 就寝スタイル〈妻年齢別〉

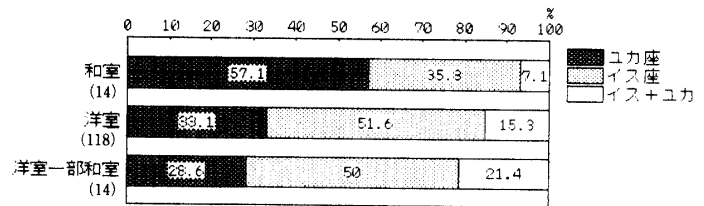


図23 接客スタイル：親しい客〈居間の和洋別〉

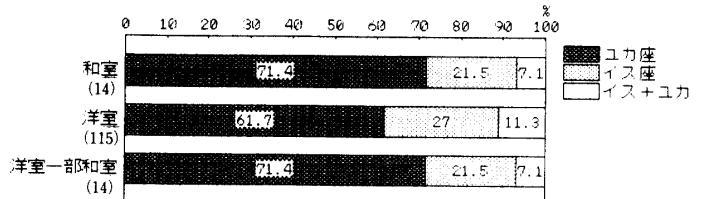


図24 接客スタイル：改まった客〈居間の和洋別〉

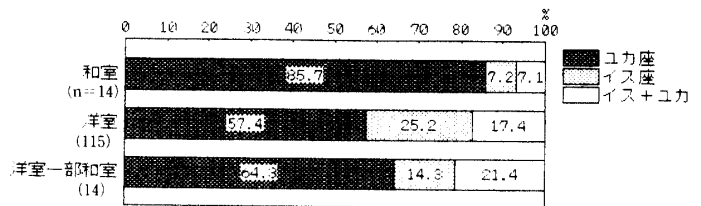


図25 接客スタイル：正月来客〈居間の和洋別〉

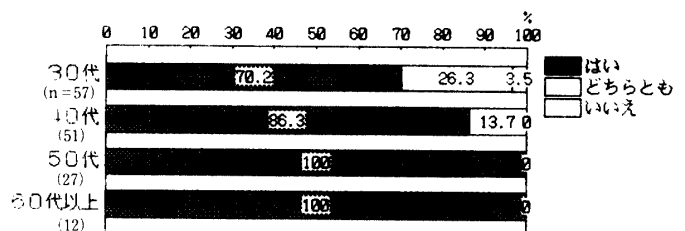


図26 和室の必要性〈妻年齢別〉

集合住宅と独立住宅の差が表れたといえよう。

これを居間の和洋別でみると(図23, 24, 25), 居間が洋室であっても「ユカ座」の比率が高く, 親しい客で33.1%, 改まった客で61.7%, 正月客で57.4%となる。団らんスタイルの「ユカ座」(16.9%)に比べ高率を示すということは, 居間以外の部屋での接客があることを意味するものと考えられる。したがって, 接客様式に関しては, 居間の和洋別による影響は小さいと考えてよいだろう。

(7) 和室要望とその用途

和室が必要か否かについて, 必要と答えた人は全体の82.8%と高率を示す。これを年齢別でみると(図26), 「40歳代」以上で若干高率となる。和室を何室必要とするかの間では, 「1室」が11.3%, 「2室」が51.0%, 「3室以上」が31.1%となり, 現状の和室保有数「3室以上」(42.3%)よりもやや低い要望数となっている。この和室要望は, 就寝スタイル及び冠婚葬祭の実施有無との関連性がある程度認められた(図略)。

また, 和室の用途は(複数回答), 「客の宿泊」72.8%, 「冠婚葬祭」59.6%, 「接客」46.4%, 「寢室」39.7%, 「季節の行事」25.2%などが主な用途としてあげられている(図27)。先に触れた集合住宅の結果とは少し異なり, 独立住宅では, 「冠婚葬祭」や「季節の行事」といった伝統的行為を意識した和室要望がみられるのが特徴である。

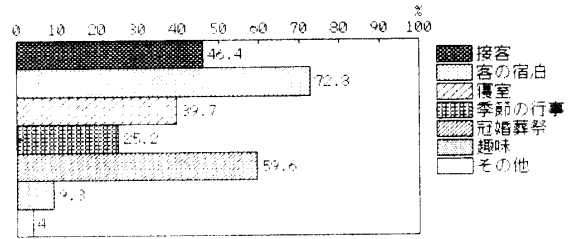


図27 和室の用途 (複数回答) (n=151)

表6 和室評価項目

1, 落ち着いた雰囲気がある A 落ち着き感
2, 格式がある B 格式・高級感
3, 高級感がある C 整然・簡素感
4, 整然とした感じがある D 古めかしさ感
5, 簡素な感じがある E 畳機能性
6, 古めかしい感じがある F 融通性
7, 畳の感触がよい G 接客性
8, カーペット敷き等に比べ掃除が楽である H 高齢者向き
9, 融通性があり多目的に使える I 家事向き
10, 床に寝転んだりくつろぐのに適している	
11, 大勢で食事をするのに適している	
12, 冠婚葬祭には欠かせない空間である	
13, 伝統的行事には欠かせない空間である	
14, 改まった客をもてなすのに適している	
15, 高齢者の部屋に適している	
16, 家事(洗濯物の整理、アイロンがけ、裁縫等)をするのに適している	

「そう思う」4点 「ややそう思う」3点 「ややそうは思わない」2点 「そうは思わない」1点

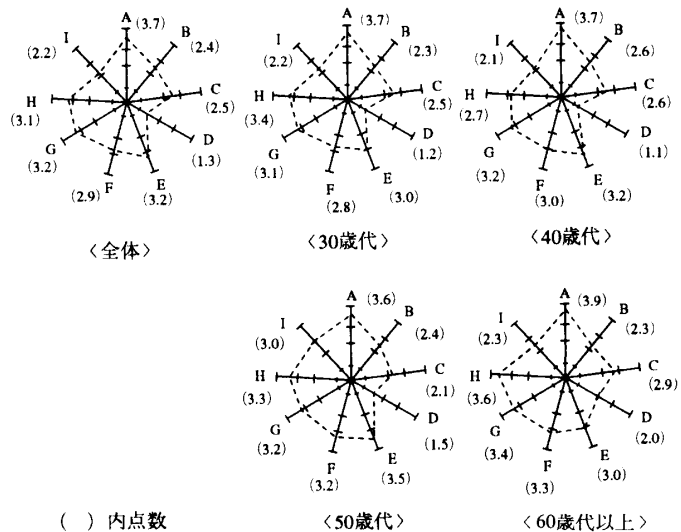


図28 和室評価得点 (妻年齢別)

(8) 和室評価

居室を和室とするか洋室とするかの判断基準には、居住者の居住歴や起居様式のほかに、和・洋室に対し抱いている印象や意識という要素も見落とせない。そこで、居住者が和室に対してどのような印象、意識をもっているのかを、表6に掲げるような和室の特徴を表すと考えられる項目16についてどの程度そのように思うのか、4段階評価で回答を求めた。その結果をもとに、「そう思う」4点、「ややそう思う」3点、「ややそうは思わない」1点、「そうは思わない」0点とし、各項目ごとの平均点を算出した。

得点の高い項目は、「落ち着いた雰囲気がある」の3.7点、「冠婚葬祭、接客向き」と「畳機能性」が各々3.2点、「高齢者向き」が3.1点、「融通性」が2.9点の順となる(図28)。「古くさい」という和室の否定的イメージを表す項目は低得点となった。これを年齢別でも各年齢間に大差はみられないが、「融通性」「整然・簡素感」「畳機能性」「接客性」の得点は、各々「40歳代」以上で概して高く、和室・続き間の保有とライフステージとの関連性を裏付ける結果が得られたといえよう。

4. 要 約

地方独立住宅における伝統的住様式の継承状況について、居住者の起居様式と意識の側面から要因分析を試みた。岐阜県住宅供給公社分譲住宅入居世帯に対するアンケート調査(151回収)から得られた結果を要約すると次のようになる。

1) 和室保有数は全体的に多く「2室」が38.2%、「3室以上」が42.3%を占める。全居室数に占める和室数の比で表した和室数率でも、その値が「50%」以上となる割合は5割強となり、和室主体の住宅が半数を超えている。この和室数と関連の認められた項目は、居室数、住宅生産タイプ、家族形態、ライフステージである。

2) 続き間和室は、全体の49.3%の住宅で保有しているが、これに影響を及ぼす要因としては、1F居室数、住宅生産タイプが浮かび上がったが、夫の年齢や冠婚葬祭の実施の有無もある程度関連がみられた。

3) 床の間付き和室は、9割強という大部分の住宅で存在し、伝統的和室形態を維持する住宅が多いことが明らかとなった。

4) 居間の洋室化はかなり進行しているものの(80.3%)、団らんの起居様式は必ずしも「イス座」が浸透しているとはいえない(56.8%)。洋室居間での「ユカ座」が16.9%、「イス+ユカ座」が26.3%を占め、ユカ座温存傾向が本調査からも認められたといえる。

また居間の座家具は、起居様式が「イス座」であっても「ソファ・長イス」の利用率は半数強にとどまり、「こたつ」の設置が夏季で14.7%、冬季で38.7%となり、和洋折衷の座家具利用が少なくないことがわかった。このような和洋折衷型の座家具利用は、居間の広さとあまり関係なく、「7、8畳」程度の居間で和洋折衷型が増え、これ以上の広さになってもその割合が増すという傾向はみられなかった。

5) 就寝の起居様式は、若い世代と高齢世代でベッド化が進行しつつあり、今後「ユカ座」の布団就寝は減少していくものと予想される。

6) 接客様式は、独立住宅においては、集合住宅における以上に「ユカ座」志向が高く、とくに「改まった客」や「正月客」など特別な接客の際の「ユカ座」率が高いのが特徴となっている。

7) 和室要望において、「2室」程度必要と考えている人が半数を超え、「3室以上」必要とする人は約3割と複数の和室を必要とする人が多い。この和室要望は、就寝スタイルや冠婚葬祭の実施有無との関連がややみられた。またその和室をどのように利用したいのかは、「客の宿泊」のための予備室としてが最も多く72.8%、ついで「冠婚葬祭」「接客」「寝室」「季節の行事」の順となり、日常生活行為のためよりも、接客や特別な行事のために必要と考えている人が多いことが明らかとなった。

8) 和室に対する居住者の評価は肯定的で、「落ち着いた雰囲気がある」「冠婚葬祭に欠かせない」「畳の感触がよい」「高齢者に向く」「触通性があり多目的」等の評価得点が高くなり、「古めかしい」というような否定的項目は低得点を示し、和室保有率や和室要望の高さを裏付ける結果となった。

註

- 1) 新田米子他「集合住宅の住戸平面に関する研究(Ⅲ) 集合住宅入居者の接客様式について」聖徳学園女子短期大学紀要 第23集 1994年
- 2) 岐阜市大字安食字志良古「サニーハイツ花かいどう」団地内に、H. 元年4棟、H. 3年に2棟、H. 4年に1棟の計7棟が建設分譲され、さらにH. 7年3月に2棟が完成している。
- 3) 続き間は、狭義に規定すれば、座敷と次の間から成り、間仕切り襖をとれば完全方形の1室となるものであるが、本論では和室が二間続きとなっているもの全てを広義の意味での続き間と規定した。
- 4) 佐藤芳美「中京都市圏の住まいに関する研究—起居様式からの考察」愛知淑徳短期大学紀要 第30集 1991年、P. 20, 21
- 5) 『調査結果からみた岐阜県における公庫融資住宅の平均像(S. 62年度～H. 2年度)』「ちょっと家づくりアドバイス」住宅金融公庫名古屋支所建設サービス課
- 6) 起居様式のユカ座温存、ユカ座回帰またイス+ユカ座折衷様式が今後も残るであろうとする見解は参考文献6)、7)に詳しく述べられている。

参考文献

- 1) 住田昌二編集著「現代住宅の地方性」勁草書房、1983年
- 2) 森本信明「延床面積と生産タイプ別にみたLDKと床の間付和室の構成—住宅金融公庫融資(個人)を受けた戸建住宅平面の研究(その1)」日本建築学会計画系論文報告集、第444号、1993年
- 3) 森本信明「L、D、K空間と和室続き間の有無からみた平面の地域差—住宅金融公庫融資(個人)を受けた戸建住宅平面の研究(その2)」日本建築学会計画系論文報告集、第451号、1993年
- 4) 沢田知子「イス座家具導入過程からみた起居様式の指向性—現代住宅における起居様式の変容過程に関する研究(その1)」日本建築学会計画系論文報告集、第438号、1992年
- 5) 沢田知子「起居様式の指向性別による「いつらい」配置形態の特徴—現代住宅における起居様式の変容過程に関する研究(その2)」日本建築学会計画系論文報告集、第452号、1993年
- 6) 青木正夫『日本の住様式と伝統』「住宅」日本住宅協会、1993年6月号、PP.2～11
- 7) 沢田知子『岐路にたつ、しつらいとふるまいのスタイル』「家庭科学」VOL.60 NO.1、1994年、PP.38～44
- 8) 季恵淳「現代日本の戸建住宅の住空間の特性に関する考察(その1)」日本建築学会大会梗概集、1993年
- 9) 桜井のり子他「戸建住宅の平面選好に関する研究 その1 平面タイプの選好傾向」日本建築学会大会梗概集、1991

年

- 10) 碓田智子他「戸建住宅の平面選好に関する研究 その2 デザイン志向と平面選好の関係」日本建築学会大会梗概集, 1991年